

改教時報



第七十五號

目次

社説

迷信勸絶論.....

論説

貧民窟の宗教(三).....安藤鐵腸
任職養成の専門學校を起すの必要を論ず.....山崎白英

社會

◎政黨改造説(第十六議會)◎女子教育と私立學校の當今の學生の讀物◎佛教青年會慈善音樂會◎紛々録◎教界彙報

雜錄

放言(二).....鎮屯漢

佛教辨士の評判(二).....自稱辨士

信界

佛陀の感化(耶舎長者の話).....楠鷗浦

今昔

前田利家.....百目木劍虹

會報

會頭久我侯爵巡回日誌◎北陸支部

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査すること。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して、善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

政教時報第七十四號目次

社説	外交の成功に際して實業家の奮起を望む……………(松島 肇)
論説	貧民窟の宗教……………(松島 肇)
社會	佛教徒と女子教育……………(松島 肇)
社説	未丁年者禁酒法案◎宗教法制定の請願◎會頭久我侯爵巡回日誌◎教界彙報◎紛々錄……………(文學士本多高陽)
信界	先德餘香……………(自稱辨士)
令	佛教辨士の評判……………(上杉文秀)
音	何をか信心といふ……………(百目木劍虹)
本誌廣告	前田利家……………(百目木劍虹)

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全
金貳錢五厘	金五錢	金三拾錢	金六拾錢	無
				無
				送
				料

◎廣告料五號活字一行(二十七字語)一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
 爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし
 東京市本郷森川町一番地

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部
 明治三十五年三月十四日印刷
 明治三十五年三月十五日發行
 發行兼編輯人 百目木劍虹
 印刷 清水朝太郎

政教時報

迷信勦絶論

迷信攻撃の論を聞くや、遠く淫祠撲滅の説を耳にするや久し、近時其の弊益々大にして力あるを見る、迷信の害毒を世に流すと極めて多く、人心を愚にし風俗を亂り醫藥を以てする等、今特に其弊を數へ其害を擧ぐるなきも迷信の勦絶すべく淫祠の撲滅すべし誰かまた之を疑はんや、我が大日本佛教徒同盟會は此に見るあり、綱領第十項に特記して曰く社會に於ける一切の迷信を勦絶する事と、これを口にするは易く之を身に行ふは難し、之を身に行ふは未だ難しとせず、これを世に施すに至ては極めて難し、迷信勦絶の如きまた然り、世の識者筆を亮にし舌を爛らして撲滅に力むるあるも、其功殆んど見るべきなく、天理蓮門の妖教は爲に衰へざるのみならず、更に此間にありて阿吽鉢羅婆は興り穴守稻荷は盛進に向へり、生殺與奪を以てして尙ほ衰へしめ難き舌の力は此の如きが、王侯の權貴も動かし能ざる筆の力は此の如きものか、筆舌の力の微なる豈敢て必ずしも然らんや、然れども之を説くものは既にその害を知るも、尙ほ淫祠に迷へるものには其等の弊耳に入らず馬耳東風之如く雲烟迷眼の如し、幾多の演説も記述も淫祀崇拜者の視聽を牽くに足るなし、是れ迷信

勦絶の實績を擧ぐるの極めて困難なる所以なり

或者は思へらく智識の開發と共に必ず勦絶さるべし、加がず教育の力に依らんにはと、其説まことに妙なり、教育の効により多少の迷信を殺し得へきは事實なり、吾人また此方面よりしてその成功を期すと雖も、一に之に依りて目的を達し得へしとは考慮するを得ず、維新以來教化普及して天理蓮門等幾多の妖教は起り、そのこれを信するもの必ずしも暗昧の人民に限らず、教育ある上等の人尙ほ之を信し、赤門前の賣卜者は學年試験前に繁忙なりと聞かずや、知るべし迷信の勦絶は管に智識の力に依てなし得べきものにあらざるを、果して然らば吾人が迷信勦絶に對する覺悟は如何、謂くた健全なる信仰を扶植するにあり、世人の妖怪を崇め禽獸を拜し、祈禱禁厭に思を凝らし妄りに福徳を願ふて狂するが如きは、理に暗くして非分の榮達を欲するに由ると雖も、この此に至らしめたるものは陋乎たる不動の信念胸底に存せざるに由る、内虚しきを以て外物に走る、若しそれ金剛不壞の信念にして胸底にあらんか、何を苦んで奇怪なる淫祠妖教に耳傾くる要あらんや、

竊て吾人は世人をして今日の迷信の淵に陥らしめたる原由を尋ねて僧侶法師の怠慢を怨むものなり、天下到る所山間僻邑の別なく法を説くの殿堂は設けられ十萬の僧侶肩を並べて江湖に逼りに拘らず、妙法を説て信念の扶植を計るべきを怠り、徒らに無事安逸を娛んで黙して語らず、甚しきは祈禱禁厭を事とし淫祠妖教と其技を争ひ却て迷信の途に導く如き之れ

何たる失態ぞ、天理教あらず蓮門教あらずと雖も此の如きものは既に邪路に彷徨し飯趣を失へる哀むべき徒なり、事の成る成るの日に成るにあらすして遠く基く所あり、淫祠妖教の盛行するは其教の廣むるわりて始めて之に飯するあらず、飯すべき原因は僧侶諸師の怠慢に依り豫め養はれたるなり、これを之れ察せず安りに淫祠の撲滅と云ひ迷信の勦絶と號し、眞信仰を興ふるを忘れ切りに攻撃の鋭を逞ふする如きは、實に思はざるの甚しきものと云はざるへからず、

急激なる一時の破壊ありて之れに代ゆる建設なき弊害は吾人之を維新の變遷に見たり、舊式の禮儀秩序は放擲されて新たなる禮儀は出て秩序は起らず、紛々として統一なく遂に風俗改良の聲を聞き禮式制定の議ある今日ならずや、吾人は淫祠迷信の害を知ると雖も、彼等に何物を興へずして迷信の破壊を企つるは勞多くして功少きを信するものなり、世の迷信勦絶を企つるもの幸に着實なる此の方法を取らんことを

(白 洋)

論 説

貧民窟の宗教 (三)

安藤 鐵 腸

貧民窟は無宗教であるといふことは前述の通りである、よ

保たれることが多い、旅の耻はかき捨てといふは、一度び郷關を出で、嚴しき社會制裁の下を離れた謂である。うれ故極めて薄弱なる社會制裁の中に居る貧民が、益々性根を腐らして、知らず識らず悪人の仲間入を爲すは、寧ろろうあるべき次第といつてよからう、臭い飯を一度よりは二度、二度よりは三度食つた方が幅が利き、未だ一度もその味を知らぬのは、卵のからが尻について居るとして齒せられざるが、彼等仲間の憲法である、殊に姦淫、私通の如きは、毫も彼等の疚しく感せざるどころで、かゝることが道德上の罪であるといふことには少しも氣付かぬのである、

此の如く罪惡の根柢たる貧民窟をそのままにして置けば、國家の存立上憂ふべき事といわねばならぬ、法律は籠の外に出た鳥を追ひ廻わして捕へる様なもので、いつまでやつたところで、界限はない、こゝに至りて道德の必要が起るのである、然れども文字なり彼等に向て高尚なる人道論を操り廻へすも其の効はない、依て宗教家に一任して彼等を導き、道德を履行せしむることが、最も捷徑で且つ有効であると思ふ、

こゝは佛教家が奮勵一番せねばならぬところで、其の方法に至ては種々あるが、要するに彼等の思想を高めて善良の道に志すやうにせしめればよいのである、先づ我輩の考へたところでは

第一、慈善學校

これは我輩も少しく實際の經驗があるので、それについて考ふるに、貧民窟の一廓に慈善學校を興して、子女を教育す

つて進んで其の無宗教なることが、喜ぶべき現象であるか、喜ぶべからざる現象であるかといふ問題に移らう、それはいふ迄もかく喜ぶべからざる現象である、勿論無宗教といふことは、人生といふ上より考へて不幸福であるに相違ないが、今は人生とか、若しくは宗教のものとのかの上について論ずるのでなく、社會風紀の上から觀察して喜ぶべからざることを斷言するのである

抑々貧民窟の衣食に窮する憫むべき貧民の群がるところたるには違いないが、此の貧民中々油断のならぬ代物で、貧民往々變じて不良民となることは稀らしくない、窃盜、姦淫、持逃げ、強奪、カドワカシ、萬引、スリ、ボン引、強盜、殺人、わらゆる罪惡の根柢はこの貧民窟に胚胎して居るといつてよからう、實際の總計から見てもこれ等罪惡の多くは貧民窟の住人である

然らば貧民窟は何故かゝる罪惡の根柢となるか、これには必然の理由のあることで、一言すれば無宗教の致すところであるが之を分解して見れば窮して盡すは小人の常であるから、世の中には平生から心を養て、たゞひ身は輻軻不遇の境界に陥り、今更食ふ米はなくても、平然として行を濫さぬといふ程の人物の少いのは無理ならぬことである、それ故大抵の者は、貧苦に責めらるゝの餘り、遂にその行を濫だす様になるのである、然しながらこの社會に入ても他が清潔であれば、それ程腐敗するものではないが、貧民窟に於ける社會制裁程薄弱なものはない、一體人間の道德は社會制裁によつて

ることば、貧民窟全體の風紀改良の上にならぬ効益がある、直接に教育する子女の間にのみ其の効益があるのではなく、其の子女の父母兄弟を感化する間接の効益は決して尠くない

第二、施療病院

人間は病氣の時程、心細く感ずるものはない、この時に於ては平素は何の考なきものにも、少からず人生の否塞を感じて煩悶苦慮するものである、かゝる際に慈善病院ありて施療施薬を感ずるは、患者の喜びは如何ばかりなるぞ、たゞい藥石効なくして病歿するも、死に際に於ける満足は、一生の不幸を忘るゝの價あらん、幸にして病癒ゆるに至らば、彼等は病中の修養に依り良心を啓發し、健全の徒も、能く人の言を容れて不良の行を改むるに至るであらう

第三、無料宿泊所

これも現に養育院幹事の安達氏と、淺草本願寺輪番の大草氏との共同事業として興されて居る、元來諸國を浮浪して、そのこといふあてのないものが、一度貧民窟に流れてこいで、そのまゝ貧民窟中の人となることは少くない、これは益々人間を墮落せしむる所以であるから、貧民窟中に無料宿泊所を置いて、此等の人をして貧民窟に墮落せしめざる様にし、且つ一方に職業を周旋して、自營の道を立たしむるの必要がある、之と同時に既に貧民窟のものにても、望のある者は、こゝに救ひ上げて正業に就かしめたらんには、その効は決して尠くないであらう、

第四、貧民授産所

貧民が不良の民となるは畢竟正業がないからである、故に之に相應の職業を授けんには、自から其の弊も改まり、遂に貧民の域を脱するに迄至るであらう、それで、慈善學校卒業の者、若しくは其の他の見込ある者を救ひ上げて、之に種々の産業を授けることが急務である、他の會社工場等と豫め特約し置て、こゝに周旋するも亦一策であらう、此從來佛教家はかくの如き社會事業には無經驗であつたが、此の如き事業に卒業盡瘁するは、宗教家の天職である、慈善事業、社會事業などは宗教家と何の關係もないといふ様の議論が、佛教界の一部にはある様だが、我輩はそうは思はない、だが、慈善事業、社會事業といふも種々あること故、そう一度に手を着けることは出来ぬ、よつて先づ貧民問題に着目して、貧民救済貧民窟改良の道を講せんことを希望する、

(完)

住職養成の専門學校を起すの必要を論ず

信州 山崎 白英

一 宗教 科學、文學、哲學、人類は是を以て未だ満足する能はず、宗教に到達して茲に根本よりの安慰を感ず、
一 寺院

寺院は法寶の藏なり、和合衆の樂園なり、然れ共寺院以外に法寶なく、寺院以外に宗教的樂園なしと云ふの非なるは論ずるまでもなき事なり、社會的存在の上に於て我此言を爲すのみ、

一 僧侶 信仰は宗教的生活の源泉なり、僧侶は群衆を導きて其濁せる心に宗教的源泉を味はしむるものなり、貴く職なり、
一 門徒 能化所化、共に一味の信仰により、相愛し相喜び、自ら其信仰の擴張に一種の熱を有す、
一 宗教學校 大學あり、中學あり、其外種々、是れ種々の僧侶を養成せんか爲なり、

一 住職養成學校設立の急務 學者なかるべからず、パンの製法をも研究せざるべからざればなり、故に大學あり、大學なかるべからずんば、中學も亦なかるべからず、今日佛教諸宗の教育誠に不完全なりと雖も兎に角一應此系統は成り居れり、然れ共大學程度まで履修する人は必しも一寺の住職たるべき人には非ず、大學の卒業生は必しも恰當の住職に非ず、宜しく更に別に大に盡す所あるべきなり、若し一宗の本山が大學に充分に餘裕を興へずして、其研究に全力を集注せしめずして、其卒業生を住職、布施使に充てんとするならば其は大なる謬見なり、
一 寺の住職たる人は

一 自ら其信仰に充ち
一 相當の宗教的智識と發達せる常識を有し
一 相當の生活を爲して紳士と同等以上の社會的品位を保ち
一 幾多の民衆の嚮導たる才能ありてよく一の團體を仕配するの堪能を有し
一 政略的ならすして眞に宗教家たるの眞情を以て、其社會的事務を洞察し、宗教家としての自分相應の事業を發見し、之を遂行するの能ある事
概して此種如の條件を充たし得る人あらざるべからず、高きを望み、多きを願はば限なき事なり、今日の急務として、先づ中學を卒業せしめ、其上に二年若しくは三年間に於て、最も實用に近き心理學、社會學、法制、經濟等を授け、且社會上の種々のインスチテューションの實地的研究を爲さしめ、而して己の寺院に歸りて力限り布教に其力を伸へしめよ、本山も亦厚意を以て此種の僧侶に充分の便利を興へべきなり
今日の僧侶が、其老年と青年とを問はず、社會的智識に缺乏するは争ふへからざる事實なり、故に監獄問題にさわくとも雖も能く其問題を事實の上に解決する能はず、貧民問題、婦人問題を論ずると雖も如何に手を着くべきやを知らざるなり、今日の僧侶が地方の寺院にありて各着手し得べき重要なる事業頗る多し、素より智者學者を要せず唯數人の有志者と團結して行は、充分成功すべくして而も之を行はざるなり一寺の住職たる者は兎に角其地方に於て宗教的事業の牛耳を執るべき人

にして常に其事に従はざるべからず、吾人は決して昔の如く宗教家が種々の事業に容喙して、社會政治的一勢力たらん事を願ふ者に非ず、今日の社會は分業の社會なり、社會上の事業は各別に擔任する所あり、特に宗教家が用もなき他の俗事に干渉するが如きは最も非なり、然れ共一寺の住職たる人は單に一人一人の信者と交際するに止まると思ふは大なる謬見なり、世の宗教家が屢々誤つて考ふる所の宗派の勢力擴張と第一に謀るは頗る非なりと雖も、可成多數の人か同一の信仰に任し、可成多數の人か宗教的安心を得、可成多數の人が深く教法の味を感じ、能く和合し、能く樂しめしめんとする眞情より出づる目的を達せんには一寺の住職たる人は餘程現今の實際社會の事情に通過して、相應の方法を講し、相應の事業を企てざるべからず、吾人不幸にして今日の佛教社會に此の如き人物の少きを思ふ、現今を以て見れば、近き將來に於ても此の如き住職を得へしとも思はれるるあり、現に今日此種類の教育を施す學校は一もある事なく、又此の如き學校の設立さるゝ風説すらも聞かされはなり、
人若し東西に飛び廻る旅行的辯士が眞に宗教の傳道者なりと思はば、其は大なる謬見なるを知らざるべからず、本山若し若し辯士養成所を設けて是れ眞に布教使を養成する者なりと思はば、其は大なる謬見なるを知らざるべからず、本山若し中學卒業生を以て一寺の住職に充分なりと思はば、其は大なる謬見なり、眞に民衆の宗教的渴望を満たすには地方に定住する、住職の力に依らざるべからず、眞に地方に根據ある宗教

的活動を望まんとせば地方に定住する住職の力に依らざるべからず、故に住職改良の急務として、住職養成の學校を設立するの必要を感ずるなり、

今や政教の關係を研究する人あり、布教の方法を研究する人あり、寺院制度の改良を研究する人ありと聞けり、吾人は眞に此種の人多くして、又熱心に之が研究を怠らざらん事を望む、而して吾人は思ふ、机上の論議、書物の詮索は頗る効なきものなるを、若し今日住職養成の學校を起し、其卒業生を用ひて各自に其寺院に於て經驗せしめ、本山も亦之を一試験の事業として實驗せば、問題の解決は却て此方面よりなされんかと思ふなり

社 會

政黨改造説

政黨の腐敗や正に其極に達し、積弊深く膏肓に入り壞廢濁濁其臭を極め、殆んど匡濟の道なきに至らんとせり、今にして政黨改造説の世に唱導され、二三の有力者實際にその計を廻らすもの故なきにあらざるなり、政黨の腐敗と黨人の墮落を厭ひ、改造の試みられたる今に始まるにあらず、憲政黨の合同も此に基く所多く、政友會の成立もまた實に之れが爲なりき、而して其結果は愈々出て愈々臭に、識者をして憂懼に耐えざらしむるものは何ぞ、組織は異り名は新なりと雖も、

第十六議會

議會開けてより十餘年、その無事平凡なる今期議會の如きは稀なり、議論もなく反對もなく太平の間に其期を了へぬ、政府の方針は國民の輿望を負ひしか故か、議すべき問題の議場に現はれざりしか、幾多の大問題議事により國民の輿情は新聞紙上に發論されたり、されど彼等は國民に代りて言ふべき口なく等しく緘黙を守り、多少已か囊裡を充すに足るも

共にまた一二の感想を有せり、

有體に吾人の所懐を語らんか、女子教育に就ては公立學校より寧ろ私立學校を取るものなり、私立學校また一種の弊なきにあらざり、然れども職員の出來瀬々として定らず、常の校長なく常の教師なき今の公立學校の弊に飽きぬ、學校をしてたゞ智識開發の場所たらしめば恕すべし、苟も徳性の培養と品位の養育を第一義とせば奚を以て甘すべき、之をして男子の學校とするも喜ぶべき事件にあらざり、殊に女子は師長の性に染み易く、また男子の如く社會の養育を受くること少く、疾く家庭に入りて兒女の撫育に従ふべきものに在ては、就學の間に一種奪ふへからざる人格を形成するの極めて必用なるに於てをや、職員の出來瀬々規則に制せられ器械的に育てらるゝ、今の公立學校の此目的に副ふの頗る困難なるを見て、たゞ設備の不完全ありとするより私立學校の取るべきを思ふものなり、比較的職員に交迭少く師弟の情誼親密なるは私立學校ならずや、校長は永く其位置にあり、教育に一定の主義あり方針あるは私立學校ならずや、時にその主義の餘りに突飛に日英同盟論を課したる如き女學校あるを耳にするも吾人は少なからざる希望を私立學校に置くものなり、幸に私立學校に關係ある士、若くは新に之か設立を計るの人、此に見るありて吾人の希望を慮ふす勿れ、

當今の學生の讀物

試に雜誌屋の店頭に立ち如何なる種類の冊子が並べられ、又

のあらんか、嗚々として相闘ふ鷄鶩の飯粒を争ふか如し、豫算問題と云ひ、律令問題と云ひ、さては鷄卵問題、鐵道問題の如き何ぞ醜態の盡きたる、彼の議員なるものは黄白の多少に依て可否を異にする恐ろしき勇氣ある徒なり、彼等に依て成されたる議會は實に危険なるものなり、然れども今や幸にして第十六議會の終ると共に彼等の議員たる期限は盡きて、新なる議員は國民に依て選舉されんとす、無節操の徒を選ば腐爛漢を擧げて後、その不徳汚行を責むるは迂なり、豫め選舉の際に當り能く人物を較量し、再ひ我帝國の議會をして汚穢醜陋の府たらしむる勿れ、

女子教育と私立學校

明治昭代の前代に誇るべきもの少からず、教育の普及の如きまた其一なり、而して教育の隆運は年と共にいよゝ盛んに、近年に至て女子教育の氣運大に高まり、都鄙を通じ公私の女學校の設立するもの少からず、而かも入學志望の學生は益々多くして、盡く之を收容する能はずと聞、現時世に喧しき社會の改良と云ひ、風俗の革新と云ひ、將た家庭の清新と云ふ皆刻下の急務たりと雖も、此等の問題たる徒らに有弊の士が筆舌に依り又は規約に依て急に成し遂げらるべきものにあらず、徐ろに教育に依て女子の智識を進め趣味を高むるの極めて秩序ある改良の手段たるを信するものなり、此故に吾人は女子教育の盛進を見て、竊かに將來に向て好望を抱くと

如何なる種類の雑誌が好んで學生に買はる、かを見よ、体裁よき美本にして、讀むに困難を覺へざる文体にて、戀愛を歌ひ、審美を説くものあらすんば彼等の一顧を値せざるなり、研究の精神、氣力は殆んど失せ、唯是れ娛樂を貪らんとするのみ、我等は暫く學生の宗教を説かざるへし、夫よりは有識の士が學生問題に意を注ぎ、米國に於ける大家か其青年風俗の傾向に注意して、講演に雜誌に、新聞に、之を論じて常に其監督を怠らざるか如く、幾十萬の學生の岐路に彷徨せず、父兄をして其意を強ふせしめん事を熱望するものなり、吾人は現今の如く先進の士が社會の公共問題に注意する所なくんば、國民相互の同情心は何時までも惹起せらるゝ事なきを信せんぞ欲する者なり、

佛敎青年會慈善音樂會界

三月九日豫定の如く青森遭難軍人弔慰の爲に催されたる慈善音樂會は、東京音樂學校奏樂堂に開かれたり、午後一時半に至れば、外國公使館員を始め、滿都の士女雲の如く集り、殆んど立錫の餘地なく無慮三千名と注せらるゝ、大日本佛敎青年會幹事文學士和田鼎氏は開會の趣意を述べ、茲に奏樂に移りぬ、此日内外の演奏者皆一流の人々なれば喝采を博したる云ふまでもなけれど、中に就き當時我國漫遊中なる獨國伯林のカイゼル嬢の獨唱に至りては特に好評にて別に一曲を促されたる程ありき、ケーベル教授の病氣の爲出席なかりしは滿場の痛く失望したる所なりき、最後の狂言うつば猿に至りては又別

に一種の興味を興へしのみならず吾人は其題目の撰擇が頗る適當なりしを喜ぶものなり、午後四時頃無事に閉會、此日生憎三時頃より雨降り初め、閉會の頃は玄關前馬車、人力車を以て頗る混雑せり、佛敎者が慈善音樂會を開きしは恐くは之を以て憾失となさん、我等はかゝる好機範の東都に示されたるを深く喜ぶ、願くは地方の慈善事業に就ても、有去者の協同して着々其歩を進められん事を祈る

教 界 彙 報

- ◎京都の佛敎圖書會社にては今度大藏經の出版を企て、全體を四號活字體點付とし、向ふ三年間に完結の見込みにて豫約を募り、而してその校閱の任には藍津賢然師當らるゝ
- ◎昨年末の調査によれば大谷派本願寺の北海道に於ける説教場二百八十三、寺院百十九にて内説教場二十六寺院十五は三十四年度の開設なり
- ◎また同派にては在臺灣の各説教場をば今回布教所と改稱したり
- ◎山口高等學校の學生諸氏は大に世態に感ずる所ありて、此度同校内に佛敎青年會を組織し、佛書閱覽所を設け、毎月二回講演會を開き以て精神の修養に力めらるゝ由
- ◎西本願寺の高輪中は徴兵猶豫の認可を得たり
- ◎清水賦附氏は西本願寺の留學生として今度ニゴールへ出立する答たり
- ◎天野若圃氏に依りて衆議院に提出せられたる宗教制度調査會設置に關する建議案は、委員附托の儘未決中に據られたり

放 言 雜 錄

放 言 (つゞき)

鎮 屯 漢

◎元來宗教の前には善も無ければ惡も無い、身是菩提樹、心

如明鏡臺、時々勤拂拭、勿使惹塵埃といふのけ、道學先生の口氣を離れず、道德臭く倫理染みて、またく宗教の眞髓骨目を會得したものと云へば、是神秀和尚が弘忍の衣鉢を受け、第六祖となれず、僅に北方の一隅に割據した所以である、夫を思ふと米搗爺が菩提元非樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃と遣付けたのは、ズント垢抜がして、純粹宗教の大旨に叶て居る、漢に此選擇をさせても、及落の判定は誤らな

◎之を我國に移して例證を引張て見るならば、念佛の元祖法然房が惡人猶以て往生す、况や善人をやと言はれたのは、ド一モ教訓的意義を含んで居て、宗教の眞面目を赤裸々にした話では無い、仁義の分際で有て大道亡びてから後の話らしい夫より弟子の愚禿氏が善人猶以て往生す、况んや惡人をやと、大膽に喝破したのは、風袋無しの正味の處で、何だか溜飲がグーと下る様な心持がする、

◎ドーモ宗教の御談義は、造惡不善の我等、極惡深重の衆生が、此身此儘の御助け、換言すれば即身成佛といふ所に尻落ち付けるで無ければ、本筋で無いらしい、此場合に於て、善だの惡だのといふ邊にマゴ／＼して居るは、百里の道を五十里行てドチラへ行くのかと、思案投首で居るやうな氣がする、◎コンナ無道徳なものなら、宗教といふものは社會の爲になるものかならぬものか、吾人に有用な無用な、ソナナ議論は聞き度もなし、言ひ度も無い、なせならは有用でも無用でも、社會に取て利でも實でも、宗教といふものは、釋迦や

耶蘇が精巧發明で考へ出したものでも作られたものでも何でも無い、天然自然に此地球上に棲息して居る眼鼻舌直の動物には、宗教を要求し宗教を食物とせねば餓饉に逼る精神を持つて居るから仕方がない、

◎それを疑ふなら、全く宗教の無い社會、宗教の存しない國民といふものを見せて貰ひ度い、夫があるなら否ソノいふ異例があることが分たなら、漢ばかりでなく、世界の社會學者や宗教學者は大に喜ぶことであらう、

◎其異例が見付からぬ間は、先宗教といふものが社會に存在する、モ一ツ言へば吾々人格の要求に出づる必然的の物であるといふことは、我々の形體には目鼻のクツ付て居ると同様の譯であると言ても善からう、

◎すると宗教嫌の人は、宗教が吾人の精神に自然に要求し様が必然に備て居様が、ソノいふ無道徳のものなら、社會の害になり、人類に不利益のものであるといふかも知れない、それはソノも言へるであらう、塙檢校は目あきは不都合な者だと言た話もあるから、

◎マア理窟は一通りこんなものかと思へる、であるから惠能和尚や、聖親鸞の語は宗教の極致を陳べたものと漢は考へて居る「精神界」一派の言議か此邊から溢れ出たのが、悟入したのでは無いかと思ふ、ソレ故精神主義といふ名は新しいが、實は古いもの其儘だと思ふ、ソレで名目は新しいが内容ば古いと言たどて惡口するのでは無い、唯事實が其通と思ふから事だ、併し又ソノ賞め稱へやうとするのもない、

◎是から少し分らぬ否漢が合點の行きにくい個條を尋ねて見様と思ふ漢の見解では、宗教が善人猶以て往生す、况んや悪人をやといふまで無道徳即善惡正邪の差別を見ぬといふは唯向上門の所談で有て悟後の修行などいふ方面と混じてはなるまいと思へる、真宗などの名目で言たら、往相廻向の分際で還相廻向の方面はソナナ物でもあるまいかと思へる、眞諦門の所談なら精神主義甚だ結果だが、俗諦門はドンナ鹽梅式のものか聞きたい、

◎世界の事物、吾人の境遇、起居動靜一切萬事如來の爲さしめ給ふといふ時は、即「昌平なる生活」「精神主義と性情」其他二三の文字を見ると、何だか大道汎兮其可左右（老子第三十四章）、天下皆知美之爲美斯惡已、皆知善之爲善斯不善已（老子第二章）、道常無爲而無不爲（老子第三十七章）毛嬙麗姬人之所美也、魚見之深入、鳥見之高飛、麋鹿見之決驟、四者孰知天下之正色哉、自我觀之、仁義之端、是非之塗、樊然殽亂、吾惡能知其辨（莊子齊物論）などあるにも似通て居る、モンこれならば、其出所は惠能や親鸞よりも猶々數層古くあり、又若し如來はコーいふものなら、道法自然（老子第二十五章）有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立不改、周行不殆、可以爲天下母、吾不知其名、字之曰道（老子第廿五章）といふもので、ツマリ自然といふことに歸する、

◎如來といふ自然の義とすれば合點が行く、併し漢等には其自然といふ如來なら、ドーモンソナに難有感せられぬ、浩々洞諸氏は大層光明がりて有りがたがられるが、漢には其邊がド

佛教辯士の評判 (二)

自稱辨士

▲雨田島地默雷先生

佛教界の老人株中に於て、能く世人と交際し、社會に於ける種々なる方面に顔を出すは島地默雷先生に候、從て其の演説も常に佛教社會にのみ限られず、時々他の社會的會合にその名を出し候、其の演説は全然舊派に屬すべきものにて、今の若手が確かり調べたる演説程、實はなく候、然れども懇切鄭重にして何人の耳にも入り、世道人心を益することは少からず候、先生若き時より無邪氣にして事に頓着なかりしも、老來世欲薄らぎ、愈々無邪氣恬憺と相成候、其の口を尖らして言のドモルをモドカシがる邊なと棄てがたき愛嬌に候、先生年既に六十を過ぐと雖、今尙依然教界の重鎮たるを失はず候

▲伊藤大忍先生

先生は佛教界の純然たる辨士に候、其の初めて世に出でたるは今より廿年前、佛教講談會創立の當時にして、平松理英先生などより少しく後進に候、沈痛にして且つ流暢なる先生の辨は、何處何時の演説會に於ても喝采を博せざることは殆んどこれなく候、固より深き造詣もなく秀でたる學問もこれなく候へども、才子にして能く時世と推移し、今尙は教界の辨士たる地位を失はず、先づこ、四五年は御安心と存候、先生一名閻魔の名あり年四十四五に候、

▲舍身田中弘之先生

いふ思想の連絡があるか、願くは教を受けたい、邪推すれば善惡邪正残らず如來の爲さしめ給ふといふアキラメ主義と光明界裡の棲息といふ難有主義とは二物を持って行てクツ付けたものでは無いかと思へる、クツ付けたなら其クツ付様を伺ひ度い、

◎又精義主義の人々は、人を殺した者を罰し、盜賊を罪するいふ様な現時の社會制度に憚焉たらざるものがある様に見へる、併し斯く成り來たのも如來の爲さしめ給ふ所で、決して人爲では無いのだから、これを苦にして彼是言ふにも當らぬ事がと思へるのは間違であらうか、

◎又今日世に倫理道徳のあるのも、如來の爲さしめ給ふ所で、宛に角今日の社會は是が爲に圓滿に治まる點が多い、然るに夫を守らぬも平氣、性情の欲する所に從へと言はゞ、吾人の行爲には全く遵ふべき準繩を與へぬのか、又與へるならドンなものであらうか、

◎之を要するに、堯舜禹湯文武と傳た儒教主義の反動として老莊の説が起た如く、精神主義も今日の形式ツクメの繁鑽なる風潮の反動としては、實に良藥である、利き目は確にありと思ふが、之を絶對的に實行せしめる教としては以上の如き種々の教を受け度いのである（をばり）

現今東京の佛教演壇に立つこと最も多きは先生に候、先生が舍身居士として佛教界にその名を顯わしたるは、今より七八年前、布教學館設立の趣意を發表したる當時に候、辨士としての先生は當時未だ世に知られざりしが、その後佛教俱樂部を設け、更に昨年東亞佛教會を設立してよりは、日となく、夜となく、至る處の演説會にその痘顔を拜見する様に相成候、先生の演説は如何に言を和らげ、語を平かにするも、到底渾々として之を導く底の演説にはこれなく、また議論縝密、微に入り細を極むる底の學理的演説にもこれなく候、侃々諤々、權貴に阿らず、富豪に屈せず、無遠慮に直言して憚からざる抗擊演説こそ其の特長に候、其の語中には隨分毒々しき惡る口もあり、皮肉なる罵倒も有之候へども、奸邪を喝破して正義を標榜するには有要の辨才と存候、先生本年四十歳に候、

▲美野田覺念先生

今でこそ美野田覺念の名は佛教界に忘られたれ、十二三年前、木挽町の厚生館に於て耶蘇退治の看板を掲げて一人演説を爲し、縦横無盡に耶蘇教の抗擊を爲したる雄辨風采は今日廿四五歳以上の青年ならば概ね其の記憶に存する筈に候、當時先生の破邪演説は有名なるものにして、これが爲め先生は深く彼の教徒の爲めに嫉まれ、彼等の歐打を被りしとも有之候、先生別に外教に關する深き研究あるには非ざれども、生來破邪の辨に富み、言ふ所一々敵の胸貫を衝き、聽衆をして思はず快哉を叫ばしめ候、乍去先生の演説をして今日に在らしむるも、當時に於ける人氣を博することは思ひもよらず候、先生

こゝに見る所ありてが、數年以前より志を教界に絶ち身を實業界に投じ候は、才人の舉動でも評すべきか、年は四十二三に候、

▲士岐善靜先生

先生は多藝なる人にて、詩歌文章、菩提茶花、何一つとして能はざるものなしと雖、事に當て精神を缺き、熱誠の態度を有せず、從て其の演説も輕妙の辨と滑稽の才とを以て其の場を胡亂化し去るの傾有之候、故に七福神の辨、祈禱辨等の造りつけの演説を何年間も振り廻わして、御座受けのするを喜び、毫も大法の宣傳に心懸けなき様見受けらるゝは誠に残念の次第に候、年は本年五十六に候、

紛々録 (米に就て) 巴 山

産地。米は夏季の高温度と多量の水を要す、故に夏季の降雨多き大河の流域及沿海の低地に盛に生長す、故に米は東南亞細亞の熱帯及亞熱帯のモンソーン區域の平原の特産なり、即印度、印支半島の諸國、東印度諸島、支那、朝鮮、日本等はなり、米食人民。一定の土地に於て米收穫量多き穀物はなく、又世界に於て人類が食料として用ふる穀物に於て米程多く食用さるゝはなし、故に亞細亞の米の此の地方は即亞細亞の最も人口稠密なる地方にして、又世界に於て最も人口稠密なる地方なり、キルヒホツノ氏曰く、モンソーン區域は亞細亞の面積の三分の一を越えずと雖も、亞細亞の人口の十分の九以上は此地方に住めり、從て人口百萬以上にも登る如き大都會の數多あるは此區域に限れり、米を主として食ふ人類の數は凡地球上全人口の二分の一と云ふ人あれ共是は過多なり、通常三分の一を稱すれ共尙多きに過く、一國人民の最大部分か米を主として食ふ地方は、日本、フィリッピン群島、スン

グ諸島、及印支半島なり、英領印度にては米を主として食ふ人民は三分の一に過ぎず、支那に於ても北部の如きは米食人民に非ず、今左に世界に於ける米食人民の統計を示すべし

- 七千五百萬人 全印度半島及ビルマ
- 二億六千萬人 支那(全人口の五分の三)
- 八千五百萬人 日本、印支半島、東印度諸島、
- 計四億二千萬人

故に世界の米食人口(ライス、イーテング、ホビユレーション)は地球全人口の三分の一より稍少し(チンヨルム氏の説)

米の貿易。米は大陸に於て産地に於て消費さるゝを以て、世界貿易の上に於ては主要なる商品には非ず、

歐洲にても西班牙フランスの平原、以大利ポー河の平原、ハンガリーの平原、又アフリカの埃及土にて産出すと雖も其量多からず、米國にてはカリナ米は其性質善く、共近來其耕作大に衰へたり、要するに歐米諸國は亞細亞より米を輸入せざるべからず、有名なる米の輸出港は次の如し、

ラングーン(下ビルマ) カルカッタ(印度) 盤谷(暹羅) バタヴィヤ(ジャバ)

蕪湖(支那) 横濱(日本)

荷造。荷造は商業上大に注意すべき條件なり、輸出する時日本の荷造は下ビルマの法に倣ひて麻袋に入る、と云ふ、

川途。我國にて飯と酒とする事は吾人よく之を知れり、歐米にては之を飯とし小麥粉に混じて麵包を製し、或は小兒の養料とし、麥酒の醸造にも混用し、又工業上金巾等の織物に附する糊となすと云ふ、

結。是に由りて之を觀るに、今日まで米の盛に食はるゝ地方は即佛教國にして、米と佛教との分布は大體に於て同じきも一興と云ふべしなり、此頃米國の大平原に於て大に米の耕作を爲さんとする事傳へらるゝ、若し米國の大平原に盛に米を産出すに至らば貿易の上に一大變動を起すなるべし、吾人は米と共に佛教が米國の大平原に盛ならん事を祈る、

信 界

佛陀の感化 (耶舎長者の話)

楠 鷗 浦

我が教主なる釋迦牟尼世尊は十九歳にして半夜鷄に王宮を脱し、父を棄てて妻子を棄てて富貴を棄てて權勢を棄てたる、一個の捨家棄欲の求道者となり、深山遠く入て道を「バガバ」アララカアラマ「ツダカ」の諸仙人に問ひ、更に苦行林にありて禁欲苦行、解脱の道を求む、されど无効にして一も得る所なきを悟るや、尼連禪河に浴し終て一投女の捧けたる乳糜を食し、氣力を回復し「ガヤ」の菩提樹下の石上に端坐し、沈思冥想に入り、若し死上正眞道を得ずば誓て此坐を去らずと誓ふ、遂に苦の原因及び之を斷除する道を發見し、一個求道の沙門は、今や大覺朗然たる佛陀となれり、以來佛陀は、諸國を歴位し諄々としてそが教化につとむ、其中感すべく喜ぶべき説話多しと雖「ペナレス」に於て耶舎長者一族を濟度せし説話の如きは、如何に佛陀の感化力の偉大なるかを知るに足る

「ペナレス」に耶舎と名けられたる一豪商あり、其一子耶舎(同名)は父母掌中の珠玉とめでいづくしする、されば隙も風にもわたらぬ程大切に養育せられ、現世的快樂に於て、一も缺乏するものなかりしかば、世界を厭ふの念極めて深く、

常に快々として樂まず、一夜煩悶に堪へかねて、深更ひそかに起て、當時「ペナレス」にありて教化を施せる、釋迦佛の所に向へり、佛は少耶舎の來るを眺め居りしに、其近くや、耶舎叫んで曰く、

「アー何たる苦しさを何たる災ぞや」

佛耶舎に告て曰く、

「此處には一の苦痛となく、一の患難もなし、我に來れ、我は郷に眞理を教へる、眞理は郷の苦痛を除却すべし」

少耶舎が此處一の苦痛も一の患難も一の悲哀もなきを聞きし時に、心中大に爽快を感じ、佛の所に行き其傍に坐しぬ、佛は彼等の欲望及び惡の空虚なるを説き、解脱の道のをべたりしかば、少耶舎は心機一轉して眞智の清涼水に浴するの感あり、翻て我身の金銀珠玉をちりばめたる衣服を着するをみ、慚愧の念に堪へざるものありし、佛は少耶舎の心を察し、之に告て曰く、

「假令人寶玉の衣をきると雖も、精神必ず之が爲に汚さるゝものにあらす、外部の形式は宗教を組織するものにあらす、また必ずしも精神に影響を及ぼすものにあらす、世俗的野心を有する人にして、出家の法衣を着することを得べし、山林に隱遁せる人にして猶ほ浮世の虚榮に心を寄するものあり、世俗の衣服を着する人と雖も、心を高く天國に遊ばしむることを得べし、衣服は決して俗人と出家を區別すべきものにあらず、之を區別すべきは、唯た私欲を滅却せしや否やの點にあるのみ」と、

少耶舎は此教訓を開き、心に佛道に入らんことを欲せり、佛陀之を察して彼に言ひらく、

「私に随へよ」

此處に少耶舎は意を決して佛敎敎團の一員となり、出家の黄衣を着せり、而して佛と耶舎と敎義を談論しつつありしとき、耶舎の父は喪跡せる一子を搜索せんがため、佛の前を過ぎ之に問て曰く、

「法王よ、貴僧は我一子なる耶舎を見ざるか」

佛は耶舎の父に謂く、

「君よ内に入られよ、君は君の一子を見出すことを得ん」

耶舎の父は之を聞いて大に喜び、内に入り、出家せる我一子の傍に座を占められたるも、佛の方のみを見れば、我子のありを知らざりき、而して佛は之に對して諄々として、説法せしかば、心智大に開悟し、云く

「ア一法王よ眞理は如何に光榮なるや、我主なる神聖なる佛陀は、傾覆したるものを起し、隠潜せるものをあらはし、道をあやまりしものに正道を指示し、眼を有するものをして物を見るを得せしむ、我は我主なる佛陀に歸す、我は佛陀に依どわらはされたる法に歸す、我は佛陀によりて建設せられたる敎團に歸す、佛陀よ今日よりして我を弟子とせよ」

耶舎の父は俗人にして佛敎々團に歸依せし最初の人なり、而して佛に歸依して心靜穩となり、そが周圍を眺むるや、一子耶舎は黄衣をき、其傍に坐せしを見る、驚て之に言て云く、

「一子耶舎よ、汝の母は全く悲哀に沈めり、早く家に歸り、バチー」なり、彼の四人の友人は、耶舎が家を棄て、髪を切り黄衣を著せしをききて心に思へらく、

「善良且英才たりし耶舎其人にして、家を棄て、世界を棄て、髪を切り法衣をきる程ならば、其佛の敎なるものは、必ずや尋常一様にあらず、尤も尊貴なる出家の道ならん」

斯くして四人の友人は、少耶舎を尋ね、耶舎は佛陀に彼等に敎訓を賜へど願ひたれば、佛は親切に説法せり、而して彼等は之を了解して、佛法僧の三寶に歸依するに至りぬ、

以上の説話は、佛陀の感化は如何に深厚なるやを示し、盛徳信仰ある人は、如何に煩悶ある人に安慰を與ふるやを示すもの、嗚呼世俗的天樂に倦厭せる人、世相の頼み甲斐なきに愁憂せる人、闇黒不明に落膽せる人、人生行路難に疲勞せる人、乞ふ來りて佛陀の遺法に安慰を求めよ、佛陀世を去りて二千五百餘歳、されど其遺法は赫として今猶ほ現に吾人の眼前に大光明を興へつゝあるにあらずや

紛々録

◎大坂の清水谷高等女學校にて二百余名の生徒に對し、女子たるを好むが男子たるを好むかの答案を徴せしに、女子を欲するもの百十七にして男子を欲するものは百二十八なりし

◎また同校にて現在の人物理想の人を求めしに福島少將下田歌子跡見花露女史等を擧ぐるもの多かりし

◎兎角己れの位置を嫌ひ、他人の身分を欲するは世の常なり、されど女子にして男子たるを願ふも多きは之れと同視すべからず、一面に於て現今の社會が男尊女卑の状態にあるに因るを知らざらばからず

汝の母の生命を救へよ」

此時少耶舎は佛陀を凝視せり、佛陀即ち言ひらく、

「少耶舎は再び俗人とならざるべからざるが、以前彼が爲せし如き世俗的快樂を受けざるべからざるか」

耶舎の父答て云く

「我子耶舎が、貴僧と共に同棲すること、利益であるならば、彼をして此處に止まらしめよ、彼は既に世俗の繋累を解脱せる故」

佛は眞理と正義を説き、彼等の精神をはげませしとき、耶舎の父曰く

「オ一主なる佛陀よ、主の隨從なる少耶舎と共に我家に來り供養を受け玉はずや」

佛陀は黄衣をき、鉢をとり、富商耶舎の家に趣きしとき、少耶舎の母及び其妻は、佛に敬禮して其傍に座せしかば、佛は亦諄々法を説くに、二婦人之を了解し叫て曰く

「オ一主よ、眞理は如何に光榮なるぞ、我々の主なる神聖なる佛陀は、傾覆したるものを回復し、かくれたるものをあらはし、迷へるものに道を示し、闇黒を明にす、我は我か主なる佛陀に歸す、我は佛陀に依てあらはされたる法に歸す、我は佛陀に依て建設せられたる敎團に歸す、佛陀よ、今日よりして我等を弟子とせよ」

少耶舎の母及び妻は、在俗の婦人にして佛の弟子となりし最初の人なり、また「ベナレス」に於て富裕なる四人の耶舎の眷族の友人あり、其名は「スバーフ」「ブニヤジター」「ガバン

◎而してまたその理想が眞淑の婦人と云はんより、女丈夫的の人物にあるを希るべからず

◎昔跡見女學校にて生徒各自の嗜好を徴せしに、色彩に就ては百三十一、紫二十一、時色八等にて、四季には秋と云ふもの五十一、春と云ふもの二十等にて、場所にては海邊と云ふもの最も多くして二十二、山之に於ては十三なりき、花にては意外にも白薔薇と云ふもの十八種、十六、梅は十四、菊は六にて白牡丹、藤の如きは僅に各々一なり

今昔

前田利家 (第二章の續)

百目木劍虹

近時史學考證の路拓けて、學者往々疑議を其間に挿むもの之れ何の故ぞ、抑も知らず英雄世を欺く慣手段に由るなきか、此の如きもの唯々徳川氏若くは毛利氏に限るにあらず、戰國時代に飛躍せる幾多英雄の素姓に於て同様なる疑議の繰返さるもの少きにあらざるなり、而して前田利家に於て傳ふる所果して眞か、

嘗て人あり、其家系を利家の長子に問ふ、利長冷然美濃より出でたる農夫なりと答へ、敢て名流の後なるを語らざりしと云ふ、之れ利長の資性、磊々落落、偏幅を修飾し己を尊ぶして得々たる、區々の徒輩にあらざりし故ならむも、或は捕捉に苦む彼が家系に纏へる密雲を一掃し、赤條々たる裸體の血統を表明せしものならずや、然れども未だ以て家系の偽を

斷するの證と爲すべからず、或人は云へり

管家の裔筑紫太宰府管廟の邊り、前田と云ふ所に住す、これ筑紫前田の因て出所なり、其子孫尾張に移るなりと云、又或人曰、然らば前田は元は藤氏にて左大臣魚名の末葉、北陸道七國の押領使越前の追捕使齋藤權介爲頼が後、六波羅の奉行人齋藤伊豫房春基が孫、前田孫四郎利世の後にあらずや、春基のこと太平記等に見へたりと

(藩翰譜)
一は筑前に住せしと云ひ、一は藤原氏なりと云ふ、此の如き異説の續出するは少くとも其傳ふる所の朦朧に基くと雖も、また確實なる基礎ありて然るにあらず、唯臆測を逞ふして村度するのみ、然らば吾人は何れに従て可なるべき、新井白石曰く『家に傳へぬ事外より論すべきにあらず』と、予また且らく之に同せむ哉、

會 報

會頭久我侯爵巡回日記

岡崎

廿一日 朝一番列車にて静岡を發し岡崎に向ふ、停車場に至れば管事を始め有志諸君の出迎あり、少時休憩の後腕車を驅りて再び岡崎町大谷派別院に向ふ、正午着す、續て演說會に移る開會の旨趣として管事之を述べ第二席百目本智理氏佛教徒の覺悟、第三席城井一秀氏日本の宗教第三席本多學士は

同盟一致の必要に就て何れも熱心に之れを辨せられ、最後に會頭の挨拶終ると共に直に茶話會の催あり、會頭始め一行悉く之に臨む會頭の謝辭と共に本多、城井兩氏の演說ありて散會せしは午後六時頃、當日の聴衆は三千餘名にして殆ど満場立錫の餘地なかりしも所謂地方有力者の參會せしもの甚だ少數に見受けぬ、從て同盟會支部の設立を見ることを得ざりしは遺憾限りなしと雖も後事を教務所有志諸君に托し置きたるを以て何れ不遠其設立を見るに至らむ、一行の爲め最も盡力せられしは左の人々なり
岩月降丸 倉梯義雄 野田諦應 菅野武次郎
進智會員 和田成玄 三浦徳英 山縣 敬
永田 淳 等の諸氏

桑名

廿三日 早起腕車を促して一行岡崎停車場に馳らす、直に桑名行の列車に搭す、列車名古屋に達し關西線に乗換ふ時不圖桑名有志として花山大安氏管事代理として今一人出迎に遇ふ、桑名驛に下車して其旅館船津屋に着、是より先き本多學士は名古屋に下車して一行に後れて到る、眞岡海氏も一身田より來りて一行に加はる、大谷派桑名別院に於て演說會あり、諸岡氏開會の旨趣、第二席眞岡學士宗教問題、第三席百目本智理氏、宗教の必要、第四席城井一秀氏佛教徒の覺悟第五席本多學士は教育と宗教最後には例の如く侯爵の挨拶あり無事散會、聴衆堂外に溢れ四千餘名に近く非常の盛會なりし右終りて茶話會あり一行之に臨む侯爵、本多城井の諸氏演說あり、同盟會設立の事を勸議として満場に圖りしに悉く賛同を表され即時に

桑名支部

設立の議成る、一行の爲めに盡されしは管事水谷現靈氏諸岡道太郎氏等數十名なり

津市

廿四日 桑名を發して津に向ふ、道一身田を過ぐるを以て侯爵を始め一行悉く下車し高田派本山に詣づ、役僧甚だ周旋せらる、案内に依りて一行拜禮を遂げ終りて茶菓の饗應を受く、侯爵は兩法主と暫く面謁された、一行も亦兩法主に拜謁するの祭を蒙りて感喜に堪へざりし、匆々辭し終りて再び乗車して直に津市に向ふ、有志十數名出迎せる、旅館聴潮館に着す、舊知の稻垣、山川、今井君等に逢ふで大に旅情を慰せるを得たり、演說會は同地寒松院に於て催されたり、開會の趣旨ありて城井一秀氏佛教徒の覺悟百目本智理氏宗教の必要、眞岡學士は宗教問題、本多學士は同盟一致の必要に就て述べ侯爵の挨拶あると共に小學校生徒の可愛らしき佛敎唱歌の妙へある聲と共に閉會を告げ終れり、此夜聴潮館樓上に於て茶話會あり、侯爵、本多、百目本、眞岡諸氏の演說ありて同盟會設立の趣旨を托し、散會せり、此日眞岡兄幹旋せられたるを以て予等一行始めて無事、半日の安息を得たる思ありき (以下次號)

北陸支部

能登鹿島郡の北陸同盟會支部は昨年本部との連絡を開きてより、毎月或は隔月に演說講話會を催し、盛んに例會の修養に盡力し近來益々會員も増加して盛運に向へり、本月は同地永光寺に於て例會を開き講師數名を聘して演說會を爲す筈なり、また同地よりの報に於ては同地方は眞宗

大谷派の門徒多き所にて從來本願寺の寄附金は好成績の處なりしが、今回の財務整理の醜金に就ては根本的に本山の組織を攻め教財二途に分ちて議院制度とし、僧侶互選の議員によりて教務を、信徒互選の議員によりて財務を議決すること、なすにあらざれば幾回の財務整理をなすも到底永遠の見込なしと云ふもの多しと、

會頭久我侯爵の一行は本月一日東海道の巡遊を了へて歸京し、更に五日新橋を發し左の日程を以て北陸巡遊の途に上られたり
六日 鯖江 七日 福井 八日 三國
九日 大聖寺 十日 小松 十一日 金澤
十二日 富山 十三日 魚津 十四日 入膳
十五日 (途中宿) 十六日 出町 十七日 高岡
十八日 羽咋 十九日 七尾 二十日 (途中)
廿一日 輪島

會頭久我侯爵一行貴地方巡遊の節は懇切なる勸迎を辱ふし感銘の至に不堪候茲に不敢取紙上を以て感謝致候也

大日本佛敎徒同盟會本部

三月 静岡 岡崎 西尾 名古屋 桑名津 岐阜 大垣 揖斐 有志諸彦御中

新刊紹介

藝苑 第一號

日本橋 文友館

豫て噂ありし本誌はいよいよ去月末に至りて其第一號を發せり、歐西の文藝美術を就き以て國民藝術の大成に資せんとするは本誌發刊の趣意にして、英文學に造詣深く原文の聞へる上田文學士主筆の任に當る、叙説みな實實を尙んで毫も

師範の風なく、戯曲音樂藝術に涉りてみな讀むべく、その照映の洒洒なる紙質印刷の精實また多く其情をいず、まことに若貴なる好雜誌と云ふべし、幸に健全なれ

兒童新聞 第一號 本郷 兒童新聞社
愛らしき清々小兒の讀物、此種の印刷物漸く繁きを欣ぶものなり、冀くは益々盛運に向はんとすを祈る

一、金三圓

三河 西參佛教會御中

一、金廿五錢

横濱 若尾國枝子殿

計金三圓二十五錢

累計金四十三圓五十八錢

嶺南被害民救濟義捐金第三回報告

文學士 清澤滿之師序
文學士 近角常觀君著

信仰の餘瀝

再版

●定價金拾五錢●特別減價拾貳錢但郵税不要●郵券代用一割増

文學博士村上專精師著

眞俗一語辨

全一冊

●定價壹冊郵税共十三錢

本郷森川町一、

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

嶺南被害民救濟義捐金募集の概

天災の怖るべしとせば、人為の災禍亦怖るべきものならずや、水火の災に罹りては、人爲の災に罹りては、嶺南の爲めに害を被るるもの亦大に憐れむべきものならずや、惟ふに足尾銅山鑛毒の害あり、川沿岸の一帶、漸く不毛の地たらんとして、其面積六萬町歩、此間に居住して害を被むる人民實に三十萬人、之を府縣に亘りては、東馬郡、新村、湊、橋玉、茨城、千葉の六村(宇)にして、八百餘村に及び、毒や之に止まらず、年々其事蔓延して、漸く麓の下を浸さんとする、豈恐れて怖るべき事ならざる、而して此等被害民は、産を傾け、家を失ひ、業務に離れ、一族離散して見る影もなき姿となり、人の養ふ能はざる、能はざるも、得ず、子を生る、も慶ぶを得ず、病も醫なく、親死するも、用ふを得ず、況んや教育救養に於てをや、冠婚葬祭に於てをや、人生の悲慘に於ては、過るものあらんや、吾人の同志は、計りて嶺南被害民救濟佛教有志會を興す、蓋し吾人は吾人が奉ずる佛教の本旨に基き、茲に廣く天下の仁人に訴へ、吾人が被害民の救濟の事に従はんとす、愷々や寒威凜烈凍風肌を裂かん、飽食暖衣、尚且つ耐ゆべからざるの感あり、及べば、憐れなる彼等無告の被害民、今將た如何かせし乎、一念を翼くば、吾人と志を同うして、彼等被害民の爲に應分の義金を捐てらるんことを

- (一) 義捐金は多少を論せず、有志者の芳志に任ず
- (二) 義捐金募集の期限は來る三月三十一日迄とす
- (三) 義捐金を寄贈者の金額芳名は之を政教時報に掲げて領收證に代ふ
- (四) 義捐金は下名宛に送られたし
- (五) 義捐金は期限後適當の方法によりて有効なる救濟を爲す

發行所

大日本佛教徒同盟會出版部

(東京本郷森川町一 電話二四三三番)